
暗闇の男

ロツツカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暗闇の男

【Nコード】

N2014T

【作者名】

ロツツカ

【あらすじ】

その部屋には数え切れぬ程のランプと男しかおらず、その他には部屋の真ん中に小さな椅子とテーブルがあるのみだった。笑顔を崩す男と、怠惰を貫く男の話。

扉が叩かれる音。部屋の中にいた男はびっくりと肩を震わせ、おそるおそる扉へ振り向いた。部屋の窓には隙間なくカーテンがかけられ、電気は消されて暗闇が作られていた。暗闇の中、無数の古ぼけたランプがぼんやりと部屋を照らしている。その部屋には数え切れぬ程のランプと男しかおらず、その他には部屋の真ん中に小さな椅子とテーブルがあるのみだった。

扉が開かれた。差し込む外の光に、男は眩しそうに目を薄める。部屋に足を踏み入れたのは紙袋を手にした銀髪の男だった。音を立ずに扉を閉め、彼は床を鳴らしながら部屋にいた男へ近付いていく。部屋にいた茶髪の男は銀髪の男を見た瞬間にほっとしたように顔を和らげ、いそいそと座りなおした。

二人の様子に特に変わったところは無い。強いて言えば、二人共に頭からはごつごつとした角が、背中からは黒い翼が生えている点だろうか。

「ほ、ほわいとくん、久しぶりだね」

茶髪の男はおどおどとした調子でか細い声を出す。困ったような笑顔を見せたが、どうやら銀髪の男を歓迎しているらしかった。手元のランプのひとつを指でつつき、中を開けてそこからクツキーを取り出す。ランプの中には炎が揺らめいていた。

「ほわいと」と呼ばれた銀髪の男は人の良さそうな笑顔をしているが、茶髪の男を見ているうちに段々とつまらないものを見るような目になまっていく。彼の左目を隠している前髪の奥からずりりとタコの足のような触手が姿を現し、うねうねと身体をくねらせた。

「長居する程私は暇じゃないんだけど」

「あ、え、ああ、ごめんねっ、迷惑だよ。ごめんね」

ホワイトは部屋の真ん中の椅子に肘をつき、つまらなさそうに椅子を揺らす。茶髪の男は震える手つきでクツキーをランプに戻した。

ホワイトは紙袋を彼の目の前に乱雑に置き、再び椅子を揺らし始めた。ごによごによと茶髪の男が何かを言いかけたが、彼の耳にはなにひとつ入っていない。

「ビター」

「……なに？」

椅子の動きを止め、ホワイトは虚空を見つめたまま口を動かした。「叔父が心配してるってさ。行かないと煩いから早く行ってよ」

「そっか」

ビターは口端を緩め、自分の爪を触る。自分の右隣にあったランプを手に取り、膝の上に置いた。ランプの上には、掌ほどの大きさの少女が座っていた。彼女を撫でるように手を動かし、彼はぼつりと言葉をこぼす。

「ほわいとくんも、お父さんとかお兄ちゃんとかって呼んだらいいのに」

「はあ？」

「あ、ううん、何でもない、何でもないからっ」

ホワイトがじろりと睨むと、ビターは縮こまり手をぶんぶん振って否定した。ビターの目が左右に泳ぐ。彼の手は小さな少女の手をとった。ホワイトの視線は一度ビターの手元、小さな少女にも向けられたが、まるで意味が分からない、と怪訝そうな顔をして逸らされた。ビターの口から声にもならなかった息が漏れる。

やがてホワイトはマントを翻し部屋の入り口へと歩いていった。慌ててビターも立ち上がろうとするが、足下のランプにつまづいて前につんのめる。ホワイトが扉を開いたところで、ビターは震えた声を出した。

「ま、また来てね」

ホワイトが振り返る。その顔は、部屋に入ってきた時の人の良さそうな顔に戻っていた。

「用が無ければ来ないよ」

それだけ吐いて、彼は躊躇いもなく扉を閉めた。部屋に冷たい空

気が一瞬だけ入って、また止む。ランプの明かりは立ちつくすビターを照らすばかりで、けして明るくはならない。部屋の中には静寂が満ちていた。彼は俯き、何か呟くように口をもごもご動かした。声は出ているものの、それが何を言っているものなのかは本人にしか分からない。そして、それを聞き返す者ももうこの場にはいなかった。

ふと、彼の後ろでランプが倒れる音がする。

「ビターさん、ビターさん」

掌ほどの大きさの少女が、いつの間にかテーブルの上までのぼってきていた。その姿を見た途端、ビターの表情が緩まる。髪を手でぐしゃぐしゃ梳き、少女に視線を落とす。少女は自分と同じほどの大きさの蝋燭の隣に座り、首を軽く傾げた。

「ホワイト、ホワイトは機嫌が悪い、悪いですか？」

「そうなのかなあ」

ビターはホワイトが持ってきた紙袋を開ける。ころんと中からクッキーが転がった。紙袋にはケーキやマカロン等、様々なお菓子がぎっしり詰まっている。その包装には、いくつも同じロゴのシールが貼られていた。彼は帰り際のホワイトの顔を思い出し、口を開く。「分かんないや」

紙袋の口を閉じて、困ったようにビターは笑った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2014t/>

暗闇の男

2011年10月8日14時55分発行